



作家・ドイツ在住 川口マーン恵美

なぜこんなところに

40年以上も前のこと、初めてヨーロッパを旅行して、イタリアのフィレンツェで使いさしの注射器が薄暗い地面に転がっていたのを見た時、私はそれを麻薬と結びつける想像力をもち合わせず、「なぜこんなところに注射器が落ちているのだろう」と本気で思った。日本は西側の自由諸国の中で、麻薬がほとんど浸透していない唯一の国だ。

天然の麻薬の中には、ケシ由来と、大麻由来があり、ケシの実からは、アヘン、モルヒネ、ヘロインなど強い麻薬、大麻からはマリファナ、ハシシ、カンナビスなどと呼ばれるソフトな麻薬が作られる。一方、コカインは南米原産のコカの葉っぱから作られ、これは強い麻薬。その他、「エクスタシー」など安価で簡単に手に入る合成ドラッグがあり、若者がディスコに行く前などに気軽に服用するのでパーティードラッグと呼ばれる（ただし、もちろん非合法）。

オランダのアムステルダム市の“コーヒーショップ”は、実は公式の大麻販売所で、世界中から詰めかけた観光客がコーヒーを飲みながら、興味半分で大麻を吸っている。夏など外にもテーブルが並んでいるので、前を通るとちょっと異様なにおいがする。そのにおいは公園などからもよく漂ってきた。

ところが、そのアムステルダムでは、昨年5月以来、公園や街角など公共スペースでの大麻の吸引が禁止となった。長年の寛大な大麻政策

による健康上の問題、治安の悪化などがあまりにも深刻になっていたからだ。今、認められているのはコーヒーショップでの吸引だけという。



アムステルダムの“コーヒーショップ”（ANP/時事通信フォト）

一方、ドイツ政府は、アムステルダムで制限の始まった大麻の所持および吸引を、今年の4月1日から合法とした。ドイツでは、カンナビスと呼ばれる大麻の吸引がすでに広がっており、保健省の21年の発表によれば、18歳から64歳の成人のうち、過去にこれを吸ったことがある人が8.8%で、過去1年以内に1度でも吸ったことのある人は450万人。それどころか、「ハンフ（大麻）協会」という組織もあり、大麻を合法にしようと、極めて活発なロビー活動を行ってきた。

それが功を奏したのか、ドイツでは今後、合法に栽培された大麻が、新しく設置される「カンナビスクラブ」で販売されることになる。1カ月当たりの購入最大量は、22歳以上が50グラム、18～21歳は25グラムで、1日の購入制限は最大25グラムとか、販売が許可されるのはトランス状態を引き起こす成分THC（ハイにな